



「子どもたちの未来のために。この地に寄り添いの精神を残したい」

「誰もが歳を取り老いていく。大事に慈しんで育てた子どもたちもやがては老いを迎える。その時、そばに寄り添ってくれる人がいてほしい。子どもたちの未来のために、この地に寄り添いの精神を残していきたい」

そんな思いから佐久市印内に地域密着型通所介護事業所マリーゴールド宅幼老所を設立した簾田やす子さん。

あたたかな日差しが差し込み、住み慣れた自宅にいるようなアットホームな空気が流れ、明るいスタッフの声に利用者からも自然と笑みがこぼれる。手作りのぬくもりが感じられる食事や利用者一人ひとりへのきめ細やかなケアは小さな事業所だからこそできる、簾田さんがこだわった介護のカタチです。



訪問看護師・ケアマネ…さまざまな学びを得て、地域密着型通所介護事業所を開設

看護師として病院での勤務経験を経て、3人の子育てに奮闘している中、看護協会から声をかけられたことをきっかけに訪問看護ステーションで働くことになったそうです。

「小さい個人の訪問看護ステーションだったんですけど、在宅ケアというものをすごく勉強させていただきました。お腹が空くとすぐに救急車を呼んでしまう方のお家では、お散歩中に見つけたニラで卵とじを作ったり、埃まみれのお家に看護師2人で行って、清拭をしたあと一人がリハビリがてらお散歩に行っている間にもう一人が部屋の埃をとって綺麗にしたり。当時はまだ介護保険制度が始まる前だったので、どうしてもご自身ではできない方には今でいうヘルパーさんのようなこともしていましたね」

その後、ケアマネジャーの資格を取り、居宅介護支援事業所で働くことに。そこでの経験が支援者としての視野を広げるきっかけになったのだそう。

「ご本人やご家族の想い、あるいはお医者さんの想い。ケアマネや事業所の立場など色々な角度から、この方をどうやって支えていこうかと考える視点を学びました。ご本人が満足する在宅生活を継続していく上ではそうした関係者同士の横の繋がりがとても大切で、色々な方と関わるうちに介護の世界にどんどんのめりこんでいましたね」

そんな中、お義父さんとお義母さんがいよいよ動けない状態になったのだそうです。

「ケアマネをしながら、両親には何もしてあげられなかったんです。『今日はデイサービスに行って』とか『今日はヘルパーさん来るから大人しくしてね』とか色々振り回してしまっただけで、それで、両親の隠居部屋でもあったこの家をちょっと改造したら、宅老所かデイサービスができるんじゃないかと思いついたんです。これまでの経験の中で感じた色々な事業所の良さや課題の中から良いところをチョイスすれば、もっと良いものができるんじゃないかって。その準備中にお義母さんは他界してしまったんですけど、でもせっかく準備したからやってみようかなって」



ケアの先に結果が出る。色々な方がいるから面白い。それが介護の魅力。

「ここはリゾートホテルにいるような素敵な環境ではないけれど、栄養面が足りない方は栄養面を、運動機能が足りない方は運動面を、清潔面を保ちたい方は清潔面の提供を、お一人おひとりのニーズに合わせたケアを丁寧にということを大切にしています」

「在宅生活を続ける上で欠かせない排泄介助も、ご家族にとっては負担の多いケアですし抵抗感を感じることは当然のことです。そうした敬遠されがちな部分にもあえてしっかりと向きあっていくことで、その先に必ずよい結果が出る。みんなで目標に向かって、お一人の方を支援していくという所はこの仕事の魅力ですね。色々な方がいて勉強にもなりますし、とても楽しいです」



○介護の仕事のやりがいはどこなところでしょうか？

「ご家族から『簾田さんの声を聞くと安心します』っていうお声を頂いた時ですね。こんなガラガラ声でごめんなさいねって感じなんですけれども。ここを拠り所にして下さっている方がいることがとても励みになっています。ご家族のためにも安心するものをご提供しなくちゃいけないなと思いますね」

「ここに来てくださっているご利用者さんも、お一人おひとりがご両親から大切に慈しまれて育ち、将来は幸せになることを望まれていたと思うんです。親はわが子が手を離れてもずっと子の幸せを願っていますし、私も母としてわが子が老いた先に寄り添ってくれる人、寄り添いの精神がこの地に根付いてほしいなと願っています。人材面や財政面で介護業界はどんどん合理化が進んでいますが、一番大切なものはそうした人の存在なのかなと思っています」

○市民のみなさんにお伝えしたい想いはどんなことでしょうか？

「色々な事業所があるので、介護保険を利用することになったらぜひ色々な所に行って体験してほしいと思いますね。サービスを利用し始めたとしても、最後まで元気であるためにはどういうことが必要かということを考えて頂けたらいいと思います」

「今はすごく健康志向になってきて町もずいぶん変わってきたように思います。一頃前は印内の村の中も歩いている人なんていなかったんですけど、ご夫婦揃って歩かれている姿を見るようになってきました。健康ブームになってきているのはとてもいいなと感じます」

(インタビューをしてみて)

簾田さんのケアのベースには、在宅生活を継続できるための視点がいくつもあり、これまでの様々な学びが今のケアに活かされていると感じました。また、そうした視点や気づきを持てる支援者の人材育成にも取り組まれ、簾田さんの元で自信をつけられ、地域へとフィールドを広げていったという職員さんのお話をお聞きし、簾田さんの目指す寄り添いの精神は地域全体へと広がっているように感じました。マリーゴールドのスタッフの皆さんの明るさにこちらが元気をもらった取材でした。